

歴史的転換期イギリスで耳に残った慣習的な英語表現

能登原 祥之

1. はじめに

2022年9月8日、エリザベス2世が崩御 (the Demise of Her Majesty Queen Elizabeth II) され、9月19日、ウエストミンスター寺院 (Westminster Abbey) で国葬がしめやかに執り行われました。その約8か月後の2023年5月6日、同寺院で華々しく戴冠式 (the Coronation) が行われ、チャールズ3世が王位を継承しました。このイギリスの戴冠式、歴史をひもとくと、ノルマン・コンクエスト以来、約960年もの長い間、同地で続いている歴史的イベントとなります。常に平和裏になされていたわけではなく、時代背景とともに何かと波乱含みのイベントでもありました (Westminster Abbey 公式 HP Coronation Stories: <https://www.westminster-abbey.org/ja/history/coronations-at-the-abbey/coronation-stories>)。この度の戴冠式も例外ではなく、寺院の外では歴史的転換期にふさわしく何かとごめいていました (e.g., コロナ禍対応, ウクライナ戦争, 首相交代, 急激なインフレ, 生活費危機, ストライキ運動, 王室反対運動)。そのような時期にイギリスに居合わせた経験をふまえ、本稿では、その当時のイギリスで耳に残った慣習的な英語表現をいくつかご紹介したいと思います。

2. The Queue

2022年9月8日現地時間夕方6時、ロンドンでエリザベス女王崩御の悲報に接します。そのニュースは、国歌 (*God Save the Queen* この日から *God Save the King*) を BGM に、BBC のニュースキャスター Hue Edwards から、哀しげに何度も繰り返し伝えられました。小雨の降る夕方、その速報を聞いた人々は、バッキンガム宮殿 (Buckingham Palace) へ向かって哀しげにゆっくりと歩き出します。驚きだったのは、発表当日の夜8時ごろ、宮殿の門の前にすでに多くの人が集まっていたことでした。その日以降、女王への哀惜と感謝の気持ちを示す献

花 (a floral tribute) があとを絶ちませんでした。女王の遺体は、亡くなられたスコットランド・アバディンシャー (Aberdeenshire) のバルモラル城 (Balmoral Castle) から、車でスコットランド首都のエジンバラへゆっくりと運ばれ、現地イギリスでは、その光景が全て TV で実況中継されました。その後、棺は飛行機でイギリスの首都ロンドンへ運ばれ、Big Ben 近くにある敷地内最古で王家ゆかりのウエストミンスターホール (Westminster Hall) に安置されました。その翌日9月14日から19日早朝にかけ、女王に「最後のお別れを」という人々が、ロンドンブリッジ (ロンドン最古の橋) 南岸の歴史的な下町サザーク (Southwark) 辺りから、ウエストミンスター宮殿に向けてテムズ川沿いに長蛇の列を作りました (The Queue)。9月16日、BBC のニュースでは、queue という言葉に、「列 (line)」という意味のみでなく、「巡礼 (pilgrimage)」という新たな意味が込められていると報じました。また、有名人サッカー選手 David Beckham もほかの一般市民と同様に12時間近く並んだことも報道され、当時この The Queue が話題となりました。イギリスでは、駅、観光地、コンサート会場、有名人気店などの入り口で、人々が列を作って並んでいるのをよく見かけます。通例 queue (名詞) は、長さに焦点を当て long[short] queue と表現することが多いのですが、当時 BBC の中継番組 (Queen Elizabeth II: Huge queues form for lying-in-state - the official BBC News YouTube channel) では、以下のように表現されていました。

- (1) **Huge queues** are forming along the banks of the River Thames.

川沿いの列は非常に長く細かったのですが、宮殿直前にある公園敷地内の列は、クネクネと蛇のように折れ曲がり、全体として多くの人々がひしめき合っており、公園を埋め尽くしているような状況でした。そ

のとき、自分としては *huge queues* という表現がさっと腑におちました。ちなみに、ほかの場面で *massive queue* のように、規模の大きさに焦点を当てた大きな表現も使われていました。この *The Queue* の報道の例に限らず、イギリスの日常会話では、*huge(ly)~* や *massive(ly)~* はさまざまな文脈でよく使われ、実際非常に耳に残る表現でした。

この *queue* のコロケーションをきっかけに、2種類の大規模汎用コーパス (COCA と BNC) を通して *queue* の言葉の使い方を少し調べてみました。結果、アメリカ英語の場合、*long[single, serial, concurrent, instant] queue* のように、「列の形状 (特に長さ)」や「列ができる時間」に焦点が当てられるのに対し、イギリス英語の場合、*long[small, big, orderly, formal] queue* のように、「列の規模 (特に大きさ)」や「列の秩序」に焦点が当てられていました。今回の調査結果のみで、単純に一般化することは控えますが、*queue* の前に置く形容詞の使い方と意味的嗜好 (semantic preference) (e.g., Tognini-Bonelli, 2001) の両者の違いはささやかにおもしろいと感じました。

さらに、同ニュースでは、参列を終えた人へのインタビューが、以下のように報じられました。

(2) A: Just tell us about your time inside Westminster Hall.

B: Well, I arrived from Whitstable this morning and we met about seven o'clock. And aha ... very very **well organised** in getting in through there. We were very fortunate to see when we actually got into the Hall, and they were changing the actual guard around the coffin. And **extremely quiet and you could hear a pin drop**. And then we walked past and it's sort of like "come to an end of era". It was that feeling you had inside of you. And, very very emotional, and, but **brilliantly done, perfectly done**, you know, the best way. Yeah.

イギリスでは *well organised*, *brilliantly[perfectly] done* のような「副詞+分詞形容詞」で言いきる表現をよく聞きます。また、*extremely quiet* のように、「*extremely*+形容詞」のような強意表現 (in-

tensifiers) (Collins COBUILD, 2017) も耳に残ります。ちなみに、同インタビューでは、*really fascinating*, *incredibly organized*, *remarkably magnificent* のような強意表現も聞かれました。このような表現は、ほかの英語圏でもよく使われますが、こと *brilliantly* は、特にイギリス人が好んで使う表現です。さらに、*you could hear a pin drop* のようなイディオムも、イギリスではよく使われます。当時のウエストミンスター宮殿内の緊張した静けさをうまく表している表現で、1回で耳に残りました。

3. The King's Christmas Message

2022年12月25日、当時イギリスでクリスマスといえば、エリザベス女王恒例の *Royal Christmas Message* (イギリス王室公式 HP *The Christmas Broadcast*: <https://www.royal.uk/the-christmas-broadcast>)。このメッセージ、実は BBC と深いつながりがあります。1922年に BBC が開局し、その10年後の1932年に大英帝国市民に向け、世界放送を開始。そのタイミングで、ジョージ5世が、ラジオを通して市民にメッセージを送られたのが最初でした。さらに、1939年、第二次世界大戦開戦時に、映画『英国王のスピーチ』でも有名となったジョージ6世が、歴史的スピーチ (*landmark speech*) を行います。大戦後、ジョージ6世亡きあとの1952年に、エリザベス2世が父のあとを継いで、クリスマスのメッセージを市民に送り、その後、約70年続けました。2022年の12月、偶然にも BBC 開局100年の記念の年に新たに王位を継承したチャールズ3世がどのように引き継ぐか、当時イギリスのちまたでも話題となりました。12月25日、現地時間午後3時には、自分も興味津々で BBC のライブ放送 (*The King's Christmas Broadcast 2022-the official BBC News YouTube channel*) を見たことを、今でもよく覚えています。そのメッセージは、以下のように始まりました。

(3) "I'm standing here in this **exquisite chapel** of Saint George at Windsor Castle. So close to where my beloved mother, the late queen, is laid to rest with my dear father. I'm reminded of the **deeply touching** letters, cards, and messages, which so many of you have sent

my wife and myself and I cannot thank you enough for the love and sympathy you have shown our whole family. Christmas is a **particularly poignant time** for all of us who have lost loved ones. We feel their absence at every familiar turn of the season and remember them in each **cherished tradition.**"

チャールズ 3 世は、Windsor 城内にある壮麗な教会 (exquisite chapel) にエリザベス女王が安置されていることを、まず報告しました。続いて、イギリス市民から送られた心に響く (deeply touching) 手紙・カード・メッセージへ丁寧に感謝の気持ちを述べました。イギリスでは、身近に荘厳な教会や歴史的なものが数多くあるからか、精巧に作られた物の美しさを表現する際に「exquisite+名詞 (精巧に作られた物)」(e. g., *exquisite* glassware, *exquisite* wooden carvings, *exquisite* taste) という表現がよく使われます。また、さまざまな強い心情を表す際に「deeply+形容詞 (強い心情)」(e. g., *deeply* concerned, *deeply* grateful, *deeply* disappointed) という表現もよく使われます。ここでの *deeply touching* の *touching* も *moving* よりは弱いのですが、比較的強い心情で、感謝の気持ちを添える際に使われます。

また、a particularly poignant time という表現。ボクシングデーである翌日 12 月 26 日には、どの新聞の一面にも、チャールズのこの言葉が写真とともに大きく掲載されました。ここで、耳に残ったのが poignant (/ˈpɔɪnjənt/) という言葉とその響き。「ポインヤン」という言葉の響きは日本人にはどこかかわいく聞こえますが、その響きとは全く関係なく「鋭さを伴う心の痛み」という意味です。Collins English Dictionary (CED) によると、sharply distressing or painful to the feelings (in British English) と解説されています。また、ある物を長い間心に留めて大切にしてきた気持ちが伝わる cherished tradition という表現。イギリス英語のコーパス BNC で確認すると、「cherished+名詞 (大切にしてきた物)」(e. g., *cherished* hopes, *cherished* beliefs, *cherished* memory, *cherished* plans, *cherished* stamp) が確認できます。今回のチャールズのメッセージは 5 分少々で終わりますが、現地

では 1 年を振り返る印象的な場面の映像、聖歌隊の讃美歌の歌声とパイプオルガンの荘厳な響きとともに放送されました。残念ながら、日本ではメッセージの部分のみ報道されることが多いのですが、毎年 full version でイギリスの慣習的な英語表現とともに楽しむことをお勧めします。

4. Richard Osman's House of Games

話は変わって、イギリスで当時人気だった TV 番組をいくつかご紹介します。まずはクイズ番組。イギリスの著名な作家 Richard Osman が司会を知的に務める BBC の人気クイズ番組 *House of Games* は、月曜日から金曜日まで毎日夕方に放映されていました。番組の最初に、司会者 Richard が風変わりな番組特製の賞品のどれに興味があるか回答者に聞くのが番組開始のお決まりパターンです。最近の放送 (Series 7:98 Champions Week 3: Wednesday - *Richard Osman's House of Games* on BBC iPlayer) では、以下のようなやり取りがありました。

- (4) R: Jay, you **have yet to** win this week, but if you do today, I have some golden prizes for you. **You could** win the cycle helmet made of gold, the reusable coffee cup made of gold, the playing cards made of gold, the compost bin made of gold, or the decanter ... I think—I think it's still made of glass, but maybe it's got a little hint of gold. **What do you fancy**, Jay?
J: Mm, I love that helmet. I mean, the cards are very tempting, but the helmet ... awesome.

yet は、イギリスではよく使われ、その使われ方もさまざまです。たとえば、このクイズ番組でのやり取りの場面。Richard が使う have yet to は、一瞬否定的に響きますが、含みとしては、相手にささやかに期待する表現 (e. g., Carter & McCarthy, 2006; Carter et al., 2011)。ここでは、少し成績の悪いクイズ回答者を優しく励ましている (encouraging) 感じがしました。また、You could ~ は、仮定法を含み、優しく提案する (suggesting) 表現。先述の *The Queue* のインタビューでも聞かれましたが、今回のイギリス滞在中でも日常会話でよく耳にしました。また、What do you fancy? は、人の好みを聞く (asking) 際にイギリスでよく使われる

カジュアルな表現で、What would you like? と同じような感覚で使われます。一度耳にすると、自分も使ってみたいと思うかわいい響きの表現で、男性女性の区別なく、よく使われます。

さらに興味深かったのが、回答者の1人 Jay の英語表現。彼は、イギリスでも有名な歌手・俳優・ダンサーですが、景品への感想で *very tempting*, *awesome* と言っていました。awesome は、アメリカでよく使われる形容詞。BBC の番組で使われているのを聞き、「これはアメリカの影響?」「時代の流れ?!」といささか戸惑いました。実際、イギリスでは、さまざまな背景を持つ人々が一緒に住んでいますし、TV の出演者の背景も本当にさまざまです。生まれも育ちもイギリスの Richard や Jay でさえ、アメリカで好まれる表現を意外とよく使っていました。ちなみに、この番組、頭をひねる難問ばかり。イギリスにある程度住んでいても、30 分間の最初から最後まで1つも答えられずに終わってしまいます。非常に「歯がゆい」クイズ番組です。

5. *Would I lie to you?*

最後にもう一つ人気のエンターテインメント番組 *Would I lie to you?* をご紹介します。イギリスで有名なコメディアン 3 名 Rob Brydon, David Mitchell, そして Lee Mack の番組です。出演者 6 名が 2 チームに分かれ、一方のチームが自分の経験談を語り、一方がその話が本当かうそかを交互に言い当てていく番組です。この番組でよく使われるのが、認識状況を示すスタンス表現 (epistemic stance markers) (e. g., Biber et al., 2021) で、回答者も自分の瞬時の認識状況に応じて表現を巧みに使い分けます。以下の例ですが、回答者たちが I と believe の間にさまざまな表現を挟んで、瞬時の微妙な心情を表現しています (e. g., *I'm slowly starting to believe*, *I can definitely believe*, *I actually quite believe*)。そんな中で、チームメイトとのやり取りを通して、最終的に納得すると、I believe と何も表現を挟まず簡潔にさっと自分のスタンスを伝えているところが妙に耳に残りました。

Rob: All right, we need an answer. So is Louise Shazia's bruised bride? Steve's frightened friend? Or Lee's caravanning companion?

Motsi: I mean, they all sound really, really bad. If any one of them is your friend, get some new friends. Oh, wow. **I'm slowly starting to believe** the story with the phone.

Rob: The Phone?

Motsi: Yeah.

Bez: **I can definitely believe** that story.

David: But **I actually quite believe** Steve, as well.

Bez: I do. I think Steve's plausible.

David: I think that's sort of ...

Bez: And they do look like a couple, look.

Lee: So you believe the caravan story?

Bez: Yeah.

David: So do you think they're all true?

Bez: **I believe** them all! (Laugh)

(Series 16 Episode 1 on BBCiPlayer)

6. おわりに

以上、歴史的転換期のイギリスで耳に残った慣習的な英語表現をいくつかご紹介してきました。イギリスの英語表現は何かと大げさと思われたかもしれませんが、基本的に、慣習的な表現は何も考えず丸ごと覚えて、丸ごと使うもの。ただ、もし時間が許せば、少し立ち止まって、表現内の語と語がともに使われる文脈や意味的嗜好について考えてみることをお勧めします。表現の振る舞いに潜む新たな魅力がじわりとわかり、おもしろいことがよくあります。

参考文献

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G.N., Conrad, S., Finegan, E. (2021). *Grammar of spoken and written English*. John Benjamins.
- Carter, R. & McCarthy, M. (2006). *Cambridge grammar of English*. Cambridge University Press.
- Carter, R., McCarthy, M., Mark, G., O'Keefe, A. (2011). *English grammar today*. Cambridge University Press.
- Collins COBUILD. (2017). *COBUILD English grammar*. HarperCollins.
- Tognini-Bonelli, E. (2001). *Corpus linguistics at work*. John Benjamins.